

POL

第104号

北海道ポーランド文化協会誌「ポーレ」

2021.9.1

総会

第35回 定例総会 13:30～

※本会会員向け(同封の返信用はがきで出欠をお知らせください)

《第99回例会》第10回「午後のポエジア」

動画鑑賞会 15:00～

※どなたでもご参加いただけます。

事前に収録した動画を鑑賞。ダンスパフォーマンス「Orawa」や紙芝居なども検討中

※入場無料・定員先着30人(座席数の半数)・予約必須(氏名・連絡先をお知らせください)

参加申込み先: hokkaidopolandca@gmail.com (協会) 080-4071-0956 (安藤)

交流会

10/31(日)

札幌エルプラザ

4F 中研修室

2011年以来恒例の《午後のポエジア》は今年で10回目を数えます。昨年はパンデミックのため開催を断念しましたが、今年は会員の皆様の熱意に応じて、個別に



取材された朗読の動画を一まとまりの映像作品に編集し、動画鑑賞会とYouTubeを通して発信するオンライン開催を企画します。

本会会員の皆様やご縁のある方々に参加を呼びかけ、「ポエジア」の伝統に立ち返りつつ、ポーランドゆかりの詩や音楽からコロナ下での生き方を探り、発信しましょう。

昨年から交流ができた「シロンスク」民族合唱舞踊団やマンガ博物館の協力も得て、「ポーランド魂」の要素と「ポエジアの伝統」を絡めたプログラムなども含め、コロナ禍にもかかわらず、大きなエネルギーを持つ例会にしたいと思います。

概要

今私は、ポーランドの大好きなあの詩を朗読したい！
あの方のあの詩の朗読をもう一度聞きたい！

スケジュール:

- 1)9月中旬～: 朗読などの映像を参加者個別に取材・撮影
- 2)10月上旬～: ビデオ作品として編集
- 3)10/31(日)交流会(動画鑑賞会)で公開後 YouTube で発信

取材会場: 札幌エルプラザなど

出演者募集要項

内容: 広い意味で日本とポーランドの文化交流に役立つパフォーマンス(文学作品の朗読、演奏など)

出演者: 1)本会会員、2)本会にゆかりのある方

※ビデオ作品のホームページ公開にご同意いただける方

出演申込み・問合せ先: hokkaidopolandca@gmail.com (協会)

080-4045-1461(熊谷) FAX 011-556-8834(安藤)

出演申込み期限: 9月30日(木)

「午後のポエジア」動画制作の呼びかけ

過去の懇親会・午後のポエジア風景



[構想]「シロンスク」舞踊団よりダンスパフォーマンス「Orawa」
動画=左上写真=、日本美術技術博物館マンガより紙芝居『遠い遠い東の国で有名になったプロニシ・ピウスツキ』=左写真=(日本語訳: 田村和子さん)をご提供いただき、これらの素材も活かして、ゆるやかなつながりをもった全体で90分程度の作品を作りたいと考えています。(担当: 松山、熊谷ほか)

COVID-19 対策

互いの距離をとり換気を十分行います。マスク着用をお願いします。飲食の提供はありません。感染拡大のため開催延期/中止になる可能性があります(予備日11/7(日))。



第105号
北海道ポーランド文化協会誌「ポーレ」
2022.1.10



2021年10月31日(日)札幌エルプラザにて《第35回定例総会》と《第99回例会》第10回朗読会「午後のポエジア」動画鑑賞会が開かれ、総会には会員13人、鑑賞会には会員・一般合わせて21人が参加しました。

制作した動画20本は後日 YouTube で公開、最初の1カ月半ほどで100~900回超視聴され大成功を収めました。すべての出演者、視聴者のみなさま、共催に加わってくださったポーランド広報文化センター、紙芝居『ブロンシ・ピウスツキ』原版をご提供くださった日本美術技術博物館「マンガ」、動画『オラヴァ』をご提供くださった国立民族合唱舞踊団「シロンスク」のみなさまに深く感謝申し上げます。(安藤厚、会長)



=写真= 上 登場した詩人・作家・音楽家・舞踊団、下 鑑賞会参加者

制作担当者より

例会「午後のポエジア」は今回10回目の節目にあたります。コロナ禍の自粛ムードは本年も波間を漂いましたが、昨年の中止を一年で納め、ポーランドの詩的言語に触れ合うこの貴重な機会は何としても止めてはいけないという気運も生まれましたので、形式の工夫次第で実施できる動画配信鑑賞の選択肢となり、制作編集を買って出ました。

それは、昨年総会の後に鑑賞した「シロンスク」舞踊団の『EXODUS』の舞踊からあふれ出るポーランドという国の文化哲学的表現の奥行き高みに向き合った、私達なりのアンサーを今年出したかったといえるのかもしれない。

計画当初はそれぞれの持ち寄る動画のパッチワーク的な全体像を想像していましたが、多少は鑑賞にたえ視覚的にも十分楽しめる内容へとシフトしていき、ロケーションの良い海岸を背景とする撮影や、江別のシアター「ども」での舞台演出に拡大されたのは自然な流れでした。

この機会を大いに楽しみ深めたい朗読者の真髄が垣間見え、カメラのファインダーからは朗読に向う精神性の横顔を切り取ることができたと思います。

長屋のり子さんの声と浅野由美子さんの版画作品のコラボは喜び的一幕となりました。

そして編集作業の後半に続々到着したのはポーランドのみなさんのカジュアルな映像。品質の高さとポーランド愛、観る者・聞く者へ寄せる優しい思いが、嬉しく楽しい画像に溢れていました。故国から遠く離れて家庭を築く北海道在住の(いまはワルシャワにお住まいの方もいました)ポーランド人の芯の強さ、豊かさに脱帽です。

動画配信という手法のおかげで、コロナ禍の下、かえってより多くの皆様に「午後のポエジア」をお届けすることができました。まずは本年10回目の節目をこの形式で祝うことが出来て安堵しています。

今後もさらにポーランドのポエジアへの親しみと向学を会員のみなさまとの豊かな交流によりお届けしたいと思います。ご協力いただきましたみなさまに感謝を添えて。(熊谷敬子)





ニューノーマル・ポエジア

今年の「午後のポエジア」はさまざまな「初めて」に溢れていました。もちろん、同じ空間を共有しない、壁に跳ね返るピアノの音が違う、懇親会の時のポーランドのケーキの匂いはしないなどの点から見ると、もはやいつもと同じ「午後のポエジア」ではないと言えるでしょう。

しかし一方で、私たちはイベントの可能性を広げ、遠く離れていて私たちの年次総会に参加できなかった(あるいは非常に長い間できなかった)人々にも、能動的/受動的な参加の機会が与えられました。

もちろん、生の出演に勝るものはないという意見も多いかもしれませんが。霜田さんの声の響きとオーラはスクリーンではいつもと違う雰囲気でした。



しかし一方で、録画・録音することで出演者の緊張感がなくなり、声や光を修正できたり、背景に明るい空を見せたり、イラ

ストをクローズアップして見せたりすることができました。

次の「午後のポエジア」はどのようなものになるのでしょうか。パンデミックの経験をどう生かすか気になります。事前録画ではなく「生放送+録画」のハイブリッドイベントにすれば、札幌以外の日本人の方も参加されるのでしょうか？かつて札幌に住んでいて、ポーランドに帰ったポーランド人の姿も見られるのでしょうか？

ポーランドの文化を広めることは当協会の主要な任務です。どのような形になっても、新しい経験を活かして、今後より多くの人々に届けられるものになればいいと思っています。

(ラファウ・ジェブカ、事務局長)=写真左=

オンライン「午後のポエジア」に出演して

ヘルベルトの詩



例年春、朗読会「午後のポエジア」という人気の催しがあり「詩劇ピウスツキ」「宮沢賢治」「私のポーランド」と連続して出演させて貰った。大きな流れに沿って詩の選択、演出、朗読法等は個人の裁量に任され、ワクワク心躍る体験だった。亡き斉藤征義氏の病身でのご出演は凄みがあり感動。個人的には声の表情の付け方の指導は貴重な財産となった。

昨年はパンデミックで開催断念。本年は事前収録で私には無理と諦めていたが、霜田氏よりお声が掛かりドラマシアター「ども」で収録。ヘルベルトの詩3作である。衣装や設定を考え取り組んだが未熟であった。もっと突き詰めた練習が必要だった。霜田氏の貴重な助言が活かされていないことを10月31日の「動画を見る会」で思い知った。

他の方々も堂々の朗唱。普段の鍛錬の差であろう。霜田氏の演劇的(時間と声量と音と小道具含めた場)の使い方の巧みさ。長屋氏の大地と交信するが如き響きある朗詠に圧倒される。他の出演者もそれぞれの演出での参加は楽しく時を忘れた。

ミハウさんの「鼻炎」ラファウさんの「蒸気機関車」子供さんの登場も面白かった。「ども」での収録・動画鑑賞会でお世話になった田中茂さんや関係の皆様様に御礼申し上げます。

(菅原三栄子)

スウォヴァツキ詩抄

このたび詩人の長屋のり子さんから『スウォヴァツキ詩抄』をご紹介いただいた。アレクサンドリアの海が題材の作品を選んだので、撮影スタッフの協力を得て、小樽の海辺でロケというなんとも贅沢な朗読・録画となった。

翻訳をされた工藤正廣先生の「あとがき」の情報には目を見張った。詩人は帝政ロシアの支配に抗するポーランド十一月蜂起の後に亡命、一生祖国に帰らず亡命先フランスで夭折。その生涯(1809~49)はみごとにシヨパン(1810~49)と重なる。



死後78年目にユゼフ・ピウスツキ元帥が詩人を国民的英雄とし祖国に遺骨を帰還させ、クラクフのヴァヴェル城大聖堂に埋葬した、その多大の配慮にも感服した。苦難に塗りつぶされた初期ロマン派詩人との遭遇は、私にとって貴重な体験となった。

(氏間多伊子)

凛として美しい詩人

シンボルスカを仰いで

～即興詩～

長屋 のりこ



〔朗読〕 ヴィスワヴァ・シンボルスカ作
「可能性」工藤幸雄訳
〔映像〕 浅野由美子版画作品
「可能性～個人的なユートピア」

経月の 歳月の 重力に逆らって 気品高く
口角を きりっと引き締めて頬に刻む人よ
終生 瞳を 眼差しを 見えない世界にまで向けて
見瞳(ひら)きつづけた人よ。真理と希望を発した詩人よ。
帽子を軽く、深く、豊かなシルバースレートの上に
のせて優雅に微笑む詩人よ。
前世紀の、悲惨のポーランドの血塗られた政治的
歴史の中で、著名な詩人、詩聖達は
亡命先のフランスで 命を閉じたというのに、
シンボルスカは国家が他国の強制に屈し、
そのくびきの下に屈辱的に生きた期間も、ポーランド
を捨てなかった。生涯、ポーランドの 知的中心と
しての古都「クラクフ」を離れなかった。ヴィスワ河を
離れなかった。ヴァヴェル城の街を離れなかった。
そして一見非政治的な詩を記したと見せながら
その実、極めて極めて政治的な 反逆の詩の数々
をクラクフで生んだ。創作した。発信した。それは
ノーベル賞を得たことで 地の果てまで駆けた。
生涯、言葉を探しつづけた詩人よ。
強度を持つ言葉たちで 編まれたその200余の
詩編の射た正鵠の絶対の、揺るがない、確かさ。
1954年のクラクフ市文学賞に始まり、ポーランド文
化賞、そしてゲーテ賞、ヘルダー賞、
1996年のポーランドペンクラブ賞の受賞。
その五日後には、輝くノーベル賞の榮譽をすら射
て。畏敬、信頼やまない 凛然 壮絶の詩人よ。
詩壇のグレッタ・ガルボとイタリア紙に、その威厳ある
美貌を称賛され、
今もその詩歌のエレガンスから 詩歌のモーツァルト
と称される詩人よ。燦然の詩人よ。希有な詩人よ。
深刻な主題に 溢れるユーモアをもって、ウィットを
もって その激情を 調和させた詩人よ。
ノーベル賞受賞詩集『橋の上の人たち』は
奇しくも歌川広重から その詩想を発想して

日本人の私に 誇らしく、親しかった。
大学中退、三度の同棲 結婚。その日常の放恣。
チェーンスマーカーであることすらも、その日常の
自然体が愛しく 素敵な 私のシンボルスカ！
あなたへの憧憬は尚も尚も加速する。
その奔放な私生活の経歴だけを
私はなぞっているのだ。
私は 慕わしいあなたの詩行から 沢山のことを学んだ。
「確信出来ることは美しい。でも確信出来ないこと
はもっと美しい」
「始まりはすべて、続きにすぎない」
「何もない」というと、何もない中に 収まらない何か
が生まれる。
何という簡潔、確信的アフォリズム。警句、箴言。
私に 出来ごとの全ては、途中のページがあけら
れていること、そう、余白の美学を私に 私達に
教えた詩人よ。見えないもうひとつの
世界をひらいてくれた詩人よ。
「見廻すだけで眼に映る奇蹟！」の詩行で、
常在する宇宙に気付かせてくれた詩人よ。
その彫琢された スウォーヴォ(slowo ことば)、
スウォーヴォ、スウォーヴォ
今日、シンボルスカ、あなたに、あなたの詩に
額ずきます。その繊細、犀利に
スウォーヴォ、スウォーヴォ、スウォーヴォ
ひざまずきます。
今宵、小樽の宇宙は
欠けることのないハーベストムーン
地の果てまでを照らし出す月。煌々の月。
凛々の月。シンボルスカの月。
あなたを仰いで、透徹の詩人を仰いで、
私の讃歌は 今日 やまない。
(ながや・のりこ、詩人、本会会員)

ヴィスワヴァ・シンボルスカ (Wisława Szymborska, 1923/7/2~2012/2/1) はポーランドの詩人、随筆家、翻訳家。ノーベル文学賞ほか数多くの文学賞を受賞。彼女は存命中の最も偉大なポーランドの詩人と考えられていた。スウェーデンアカデミー・ノーベル委員会は彼女を「詩歌のモーツァルト」「言葉のエレガンスとベートーヴェンの激情とを調和させつつ、深刻な主題にユーモアをもって取り組む女性」と評した。(ja.wikipedia, Fot. PAP/CAF-Arch 1954)

ブロニスワフ・ピウスツキと紙芝居

～朗読者の対談から～



ぼくは本名はブロニスワフですが、みんなに親しみをこめてプロニシと呼ばれていました。



紙芝居全 18 枚より

新井=↑写真右=「午後のポエジア」に新しい演目加わるだけでなく、ブロニスワフ・ピウスツキ(愛称ではプロニシですが)その語りをポーランド人ジェプカさんがポーランド語で、私が日本語で朗読すると伺ったときから、とても楽しみでした。

ジェプカ=左=:紙芝居自体もポーランド人の作品ですからね。文を寄せたカタジナ・ノヴァクさんはクラクフの「マンガ」館に設立の初めの頃から勤めていて、在ポーランド日本大使館や日本の大学との交流にも尽力し、両国が共有する歴史的な事柄を紹介するイベントも主催しています。この紙芝居もまさにそのひとつです。

新井:最初に目を通したとき、紙芝居としては、日本ではあまり見かけないタイプの内容だと思いました。

ジェプカ:ポーランドでも見たことがありません。子どもたちには、紙芝居という手法そのものも新鮮で面白く感じられると思います。

新井:確かにそうですね。紙芝居のもつ手作りの性質は、プロニシが、作中にも登場するグラレ・コレクションで展示を組み、手工芸を通して人力の大切さを伝えようとしていたことにも通じます。彼は、博物館学の素養が高いことでも、生前から評価されていました。ところで、今回演じるときには、どんなことを心がけられましたか？

ジェプカ:プロニシは大変な人生を送ったので、まずは強そうな声で演じたかった。ところが心の優しさや旺盛な好奇心も持ち合わせている。思いのほか難しい役作りになりました。

新井:私も表現したいプロニシ像があるのですが、さすがに男性の声は出ない(泣)。そこでラジオドラマの声優さんのような女性の朗読を意識しました。

ジェプカ:私より新井さんのほうが声優に向いているのは確かですね(笑)。

新井:そう言っていただくと、救われます(泣笑)。録画を見るとやり直したい部分も目につきますから。録画については、先生もご自身の記事(POLE105 p.2)で触れられていますね。

会場では、紙芝居を背面のスクリーンに大きく映した方が後方の席までもっと見えやすいのではないかと思ったのですが、録画では紙芝居舞台の木の味わいが伝わってとてもよかった。熊谷さん=↑写真右=の選択に学ぶことは多いですね。

(ラファウ・ジェプカ 事務局長、新井藤子)

ご挨拶

カタジナ・ノヴァク

日本美術技術博物館マンガ副館長



ポーランドの優れた民族言語学者ブロニスワフ・ピウスツキを子どもたちにどうやって見せるか？それには日本の紙芝居のようにこの年齢層にも受け入れられる形が最適でしょう。

『プロニシ・ピウスツキ～遠い東の国で有名になったポーランド人の話』と題された、ピウスツキの生涯と研究についての魅力的な物語は、パウリナ・パジヂェラが美しい挿絵を描き、カタジナ・ノヴァクが文を寄せ、田村和子氏の美しい翻訳によってポーランドと日本の聴衆の間で好評を博しました。

紙芝居には、プロニシの生家、11人の兄弟姉妹、シベリア流刑、アイヌをはじめとするシベリアや日本の先住民との友情、祖国への帰還、ザコパネ高地(グラレ)文化の研究などが描かれています。

私は東京で、初めて紙芝居を実演する機会を得ましたが、若い方は興味をもって受け止め、年配の方には子どもの頃のよい思い出になったようです。

このたび、安藤先生のご尽力で北海道でも日本語版が初演され感謝しています。(安藤厚訳)

